

彼女が親友と  
2人きりになった夜

待宵草

※本作は

『彼女が親友に褒められた夜』

『彼女が親友を受け入れた夜』

の続編です。

前作を先にお読みいただくと、より楽しめます。

登場人物

陽斗(28)

美咲の恋人。

遼とは大学時代からの親友。

美咲(27)

陽斗の恋人。

真面目だが流されやすい一面もある。

遼(28)

陽斗の親友。

無口であり感情を表に出さない。

紗奈(26)

遼の恋人。

明るく奔放で場をかき回す。

あの日のあのあと、どうやって過ごしたかは覚えていない。

誰が最初に口を開いたのか。

誰が先に服を直したのか。

帰るって話になったのか、それとも自然に朝になったのか。

そのあたりの記憶が、ひどく曖昧だった。

ただ、翌朝の空気だけは覚えている。

窓の外が白くなっていて、部屋の中に残った酒の匂いが少し重かった。

誰も大きな声を出さなかった。

紗奈はいつもより口数が少なくて、遼もほとんど喋らなかった。

美咲は俺の隣にいた。

それだけで、少し安心した。

安心していいのかも分からないのに。

「帰ろうか」

たぶん、そう言ったのは俺だったと思う。

美咲は小さく頷いた。

遼の部屋を出る時、紗奈が何か言った気がする。

「またね」だったのか。

「ごめんね」だったのか。

それすら、はっきりしない。

遼は玄関の近くで、いつもみたいに短く言った。

「気をつけて」

それだけだった。

俺も何か返したはずだ。

でも覚えていない。

覚えているのは、エレベーターの中で美咲がずっと床を見ていたこと。

その横顔が、いつもより少し疲れて見えたこと。

そして俺が、何も言えなかったこと。

外に出ると、朝の空気が冷たかった。

駅までの道を、俺と美咲は並んで歩いた。

手は繋いでいなかった。

でも離れてもいなかった。

微妙な距離。

いつもの距離とほとんど変わらないはずなのに、何かが違った。

美咲の髪が風で少し揺れる。

俺はそれを見ていた。

見ているうちに、昨夜のことが頭をかすめる。

美咲の顔。

遼の手。

紗奈の声。

俺は目を逸らした。

朝の道には、犬の散歩をしている人がいた。

コンビニの前で店員がゴミ袋をまとめていた。

普通の日曜日だった。

何もなかったみたいに、街だけが普通だった。

それが変に腹立たしかった。

「美咲」

自分でも、少し掠れた声だった。

美咲がこっちを見る。

「なに？」

その声はいつも通りに聞こえた。

でも目だけは違った。

眠そうで、疲れていて、少しだけ怯えているようにも見えた。

俺はすぐには言えなかった。

聞くべきじゃない気がした。

でも聞かないまま帰ったら、たぶんずっと残る。



そう思った。

「昨日のこと」

美咲の足が、ほんの少しだけ遅くなる。

「うん」

「後悔してる？」

口にした瞬間、胸の奥が冷えた。

聞いてしまった。

美咲はすぐには答えなかった。

前を向いたまま歩いている。

信号が赤になる。

俺たちは横断歩道の前で止まった。

車が一台、目の前を通り過ぎる。

その音がやけに大きく聞こえた。

美咲は、少しだけ笑った。

困った時の笑い方だった。

「どうだろ」

「どうだろって」

「分かんない」

美咲はそう言って、信号を見た。

青になった。

でも俺たちはすぐには歩き出さなかった。

「後悔してないって言ったら、変だし」

美咲が続ける。

「してるって言っても、なんか違う気がする」

俺は何も言えなかった。

たぶん、俺も同じだった。

後悔している。

そう言えば、簡単だった。

恋人がいるのに。

親友がいるのに。

あんなことをしてしまった。

普通に考えれば、後悔しているに決まっている。

でも。

決まっているはずなのに、そう言い切れない。

美咲が遼に見られていたこと。

その時の美咲の顔。

俺を見た時の目。

その全部が、頭の中に残っていた。

嫌だった。

嫌だったはずなのに、何度も思い出してしまう。

「陽斗は？」

美咲が聞いた。

今度は俺が黙る番だった。

「俺も」

そこまで言って、止まった。

俺も分からない。

そう言えばよかった。

でも、その言葉すらうまく出てこなかった。

美咲は俺の顔を見て、少しだけ目を細めた。

「分かんないよね」

先に言われた。

俺は小さく頷く。

「分かんない」

「だよね」

美咲はまた前を向いた。

それで会話は終わった。

終わったというより、続けられなかった。

駅に着くまで、俺たちはほとんど喋らなかった。

改札の前で別れる時、美咲はいつものように手を振った。

「また連絡するね」

「うん」

「ちゃんと寝て」

「美咲も」

それだけだった。

美咲が改札を抜ける。

一度だけ振り返るかと思った。

でも振り返らなかった。

俺はその背中を見ていた。

見えなくなるまで。

それからスマホを出した。

特に何か通知が来ているわけじゃない。

ただ、何かを確認したかった。

画面に映った自分の顔は、ひどく疲れていた。

その日の午後、俺はほとんど寝て過ごした。

何度か目が覚めた。

そのたびに昨夜の断片が浮かんた。

美咲の声。

紗奈の笑い方。

遼の静かな横顔。

そして朝の美咲の言葉。

後悔してないって言ったら、変だし。

してるって言っても、なんか違う気がする。

何度も頭の中で繰り返した。

たぶん、俺たちは同じところにいた。

---

月曜になっても、それは消えなかった。

仕事をしている間は、普通に過ごせた。

メールを返して、資料を作って、昼にコンビニで弁当を買った。

いつも通りだった。

でも、ふとした瞬間に思い出す。

白い朝。

隣を歩く美咲。

「分かんない」と言った声。

俺は何度もスマホを見た。

美咲からは普通に連絡が来た。



美咲：

おつかれ

俺：

おつかれ

美咲：

今日忙しかった？

俺：

まあまあ

美咲：

ちゃんと食べた？

俺：

食べた

普通だった。

普通すぎて、逆に苦しかった。

あんなことがあったのに、俺たちは普通に会話をしている。

それが前と同じなのか、前より壊れているのか、分からなかった。

火曜も同じだった。

美咲とは普通にLINEをした。

紗奈からグループLINEは来なかった。

遼からも何も来なかった。

四人のグループは、最後の飲み会の日から止まったままだった。

誰も触れない。

誰も消さない。

その沈黙だけが残っていた。

---

水曜の夜。

仕事帰りに遼からLINEが来た。

遼：

今日、飲まないか

それだけだった。

でも、何の話かは分かった。

俺：

いいよ

遼：

いつもの店で

短い返信。

いつも通りの遼。

なのに、その一文だけで胸の奥が少し重くなった。

店に着くと、遼はもう奥の席にいた。

「おつかれ」

「おつかれ」

向かいに座る。

ビールを頼んで、軽くグラスを合わせた。

最初は、仕事の話をした。

どうでもいい近況。

最近忙しいとか、上司が面倒だとか。

本当にどうでもいい話。

でもお互い、そこに本題がないことは分かって

いた。

二杯目に入る前だった。

遼がグラスを置いた。

「謝りたかった」

いきなりだった。

俺は箸を持ったまま止まる。

「この前のこと」

遼は俺を見ていた。

いつもと同じ顔。

でも、目だけは少し違った。

「謝ることあるか？」

そう聞くと、遼は少し黙った。

「紗奈に、前から言われてた」

「何を」

「こういうこと、してみたいって」

喉が詰まった。

遼は続けた。

「俺は断ってた」

「……そうなのか」

「うん」

遼は水を一口飲む。

「本気にしないようにしてた。冗談みたいに  
言ってたし」

「紗奈らしいな」

「でも、あの日は止められなかった」

俺は何も言えなかった。

紗奈が空気を動かしたのは事実だった。

でも、それだけじゃない。

止めるタイミングはあった。

俺にも。

遼にも。

たぶん全員に。

「紗奈の暴走を止められなかった」

遼が言う。

「申し訳ないと思ってる」

「遼だけのせいじゃないだろ」

俺は言った。

「俺も止めなかった」

「陽斗」

「後悔してるか」

「わかんない」

そう言って、あの日の美咲を思い出した。

駅までの道。

信号の前。

美咲の困った笑い方。

後悔してないって言ったら変だし。

してるって言っても、なんか違う気がする。

「美咲にも聞いた」

俺は言った。



「何て？」

「分かんないって」

「そうか」

遼はそれだけ言った。

俺はビールを一口飲む。

「俺も分からなかった」

「うん」

「でも、今は少し分かる」

遼が俺を見る。

俺はグラスを見たまま言った。

「後悔はしてない」

言った瞬間、胸の奥が重くなった。

でも、嘘ではなかった。

「悪いことをしたとも思ってる」

「うん」

「美咲にも。紗奈にも。遼にも」

「俺に？」

「親友の彼女に、あんな感情を持った」

遼は何も言わなかった。

だから俺は続けた。

「美咲が遼に見られてるのも、嫌だった」

「……」

「でも、見てしまった」

嫌だった。

嫌だったはずなのに。

目を逸らせなかった。

「美咲が、俺じゃない男に意識されてるところを」

言葉にすると、ひどく最低だった。

でも、もう隠せなかった。

「嫌なのに、興奮してた」

遼はしばらく黙っていた。

それから短く言った。

「俺も」

俺は顔を上げる。

「後悔はしてない」

遼は淡々と言った。

「でも、申し訳ないとは思ってる」

「美咲に？」

「美咲にも。陽斗にも」

少し間が空く。

遼はグラスを見た。

「美咲に興味を持った」

胸の奥がざらついた。

でも、怒れなかった。

俺も同じだったから。

「紗奈が陽斗を見てるのも嫌だった」

遼は続ける。

「でも、分かるところもあった」

「何が」

「目が離せなくなる感じ」

それ以上、遼は言わなかった。

でも十分だった。

俺たちは同じものを見ていた。

恋人が自分以外を見る瞬間。

親友が自分の恋人を見ている瞬間。

そこにある嫉妬と、興奮。

「最低だな」

俺が言うと、遼が少しだけ笑った。

「そうだな」

その一言で、少しだけ息ができた。

許されたわけじゃない。

正しいことになったわけでもない。

でも、俺だけじゃなかった。

それだけは分かった。

少し沈黙してから、俺は言った。

「紗奈もさ、自分で火つけて自分で嫉妬するよな」

「する」

「即答かよ」

「事実だから」

少しだけ笑った。

「美咲もさ」

「うん」

「真面目なのに、押されると弱い」

「分かる」

「分かるのかよ」

遼は頷いた。

少し腹が立った。

でも、否定はできなかった。

「紗奈が言ってた」

遼が言う。

「何を」

「美咲と陽斗は似てるって」

「どこが」

「押されると弱い」

「失礼だな」

「たぶん当たってる」

否定したかった。

でも、できなかった。

遼はグラスを置いた。

「でも、もうやめた方がいい」

その言葉で、空気が変わった。

「俺たちは、それぞれ付き合ってる」

「うん」

「美咲は陽斗の彼女で、紗奈は俺の彼女だ」

「分かってる」

「大事にした方がいい」



正しい。

正しすぎて、何も返せなかった。

「俺もそう思う」

俺は言った。

「このまま続けたら、たぶん戻れなくなる」

「もう戻れてないかもしれない」

遼が言う。

「でも、止めることはできる」

俺は頷いた。

「もうやめよう」

遼も頷いた。

それで終わるはずだった。

終わるべきだった。

でも、会計を済ませて店を出る前。

俺は遼を呼び止めた。

「遼」

「何」

自分でも、最低なことを言おうとしているのは分かっていてた。

でも、さっきの会話が頭から離れなかつた。

後悔はしていない。

でも、申し訳ないとは思っている。

嫌だった。

でも、目を逸らせなかつた。

俺も、遼も、同じようなことを言った。

それなら、このまま終わったことにしていいいのか。

何もなかったみたいに、美咲と付き合っていけるのか。

次に遼と会った時、普通に笑えるのか。

紗奈がいつもの調子で冗談を言った時、本当に何も思わずにいられるのか。

たぶん無理だと思った。

一度越えたものを、見なかったことにはできない。

でも、ずるずる続けたいわけでもない。

終わらせるなら、曖昧に蓋をするんじゃなくて、ちゃんと全員で選んで終わらせたかった。

「これで終わりにするならさ」

遼は黙って俺を見る。

「何もなかったことにして終わるのは、たぶん無理だと思う」

言いながら、自分でも苦しい言い訳だと思った。

でも、嘘ではなかった。

「後悔してるのかも分からないまま、忘れたふりするのも違う気がする」

遼は何も言わない。

「だから」

一度、言葉が止まった。

喉が乾く。

「最後に、もう一回だけっていうのは」

言った瞬間、自分の声が少し遠く聞こえた。